

## ○ ひきこもりの相談支援の実績・現況

ひきこもりの相談支援は、従来、保健所の保健師や精神保健福祉士が中心となって行ってきたが、令和元年度からは福祉総合課の「福祉の総合相談窓口」においても相談を受けるようになり、同窓口の相談件数が増加している。福祉と医療の専門職が本人や家族が抱える複雑な課題を受け止め、関係機関と連携し包括的な支援を行っている。令和7年4月から、本人が安心して過ごせ、就労支援等を含めた多様な社会参加の機会の一として「めぐろのいばしょ」事業を開始した。

### 1 相談件数

いずれも延べ件数

#### (1) 区全体

種別	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
福祉の総合相談	395	497	381	585
保健所の相談	50	84	90	83
総計	445	581	471	668

#### (2) 内訳

##### ① 福祉の総合相談

区分	令和3年度			令和4年度			令和5年度			令和6年度		
	ふくし	くらし	計	ふくし	くらし	計	ふくし	くらし	計	ふくし	くらし	計
家庭訪問	35	8	43	37	15	52	34	5	39	85	26	111
所内相談	41	137	178	53	166	219	79	128	207	119	140	259
電話相談	79	95	174	50	176	226	103	31	134	107	96	203
オンライン	-	-	-	-	-	-	1	-	1	9	-	9
その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	3	3
計	155	240	395	140	357	497	217	164	381	320	265	585

\* 「ふくし」は、保健福祉に関する相談を受ける「ふくしの相談」

\* 「くらし」は、生活困窮などに関する相談を受ける「くらしの相談」

##### ② 保健所の相談

区分	保健予防課				碑文谷保健センター			
	3年度	4年度	5年度	6年度	3年度	4年度	5年度	6年度
家庭訪問	15	12	29	5	6	18	37	32
所内相談	2	11	8	16	6	9	9	7
電話相談	4	10	26	5	17	24	23	18
計	21	33	21	26	29	51	69	57

\* 居住地域により担当の相談窓口は保健予防課と碑文谷保健センターに分かれる。

\* 令和7年度の組織改正により、保健所の担当課が地域保健課となる。

## 2 事業実績

### (1) 思春期・青年期の親の会

保健予防課では、子のひきこもりや不登校で悩む親を対象に、ミニ講話や座談会を実施している。令和6年度には12回開催し、個別相談と合わせて24人の参加者があった。

### (2) ひきこもり相談会

福祉総合課では、窓口での随時の相談とともに、年1回(2日制)の相談会を実施している。令和6年度の相談件数は10件で、家族からの相談が大半を占めているが、本人からの相談も2件あった。

### (3) ひきこもり支援講演会

8050問題や地域での孤立防止、ひきこもりへの理解をテーマに、専門家だけではなく、当事者や当事者の家族が講師を務める講演会を開催している。オンラインと会場のハイブリッド開催で、令和6年度は合計53名が参加した。(来場者37名、オンライン参加16名)

### (4) めぐろのいばしょ

ひきこもり当事者の居場所づくりとして「めぐろのいばしょ」を開始した。(令和7年4月～) NPO法人楽の会に委託し、ひきこもり経験者や家族がピアサポーターとして、当事者目線で運営している。令和7年度参加者数(4月10人、5月12人、6月12人、7月12人、8月15人、9月12人、10月14人)

## 3 事例

ひきこもりや精神疾患の家族を80代の父(疾患あり)が支える、複合課題のある世帯

時期	令和6年
支援対象の本人及び家族の状況	ひきこもりの状態にある本人(40代)と両親、弟の4人暮らし
相談者	叔父
相談に至った経緯	近くに住む叔父からの相談。本人は大学を中退後に一時就労していたが、その後15年以上でひきこもっている。母と弟は精神障害を抱え、通院治療を続けており、体調が良いと家事を手伝う。金銭管理や家事のほとんどは父が担っているが、心不全や大動脈瘤があり、通院治療を継続中。
対応・支援の内容、経過	○家族の家事を一手に引き受けている父の健康状態が不安定であり、今後父の体調が悪化することで家族の生活が立ち行かなくなることが考えられた。 ○父の負担を減らすため、サービス導入を勧めるが母の拒否が強かった。包括支援センターが関係性を構築しながら、介護保険サービスの利用につなげる支援を行った。 ○ひきこもりの状態にある本人については、精神疾患の診断歴があるが治療を中断していることが分かった。父母へのサービス導入をきっかけに支援者とともに本人との関係を構築しながら、医療へつなぐため地域保健課と連携を行った。
担当者所感・課題	○ひきこもりに関する相談をきっかけに、家族全体の課題が明らかとなった。今後、父の体調が悪化することで家族全体の生活が立ち行かなくなることが想定され、支援者は関係機関と連携を図り役割分担を行いつつ、相談者に寄り添いながら課題をひとつずつ整理して、一緒に悩み考えながら対応した事例である。 ○家族が多問題を抱えている場合、ひきこもり状態にある本人には、フォーカスされにくい状況がある。しかし支援に入る関係者と連携し、本人との関係も構築しながら保健所と連携することができた。